

載せば風帆の力に因て、能く一日に數百里の遠きに至る。劣夫は己が身力を以ては、驢馬に擲つても、天に上るこゝ能はざれども、轉輪王の行に従へば、王の力にて、便ち虚空に於て飛騰自在である。十圍の索は多人の丈夫も、之を制るこゝ能はざるも、童子も劍を揮へば、忽爾に兩分する。鳩毒を水に投れば、魚貝悉く斃死するが、犀角之に觸るれば、死者皆復活する。等の例を借りて、一切萬法皆自力自攝他力攝がありて、千開萬閉無量無邊である。況や五不思議中に、佛法最も不可思議である。三界の繫業を斷ちて、安樂國に往生せしむるは、是れ他力佛法の不思議である。凡夫有碍の識りを以て、無碍の佛法を疑議ふ勿れ云ひ。更に肝要を示して、凡夫の彼國に往生するは、阿彌陀如來の大願業力が増上縁なる云はれてある。宗祖聖人は、このこゝろを「正信念佛偈」に、

一生造惡值弘誓、至安養界證妙果

と述べられた。

第五祖善導大師は、撰述された四帖疏の第四「散善義」の初に、「觀經」の三心を解釋するに就て、凡夫得生の安心を示すに、二河白道の譬喩を設けられたが、其譬喩を説く前に、凡夫が三界の繫業を解脱して、無漏の寶國に往生するは、是れ佛法力の不思議である云々宣明された。其處にも五の譬を舉て例してある。明は能く闇を破る(光明は能く黒闇を破る)空は能く有を含む(虚空は何ものをも嫌はず皆能く包容する)地は能く載養す(大地は何物をも能く載せもし養成もする)水は能く生潤する(水は能く物を濕潤す)火は能く成壞する(火は能く者を成熟させ、又物を破壊す)此等は皆眼前の事實で、

千差萬別で、功用各別、誰人も疑議せぬ事實である。況や佛法不思議の力、豈種々の利益がなかるべきや云ふてある。而して更に二河白道の譬喩を説て、惑業苦三道流轉の凡夫が、彌陀の本願力によりて、能く界外無漏の寶國に入りて、法性の常樂を證ることを示さる。されば、凡夫が内外の何物にも碍へらるゝこゝなく、直ちに眞實報土に入る、本願力の徳用が、是れ佛法力の不思議である。宗祖聖人は此意を「和讃」に、

佛法力の不思議には、諸邪業繫さはらねば

彌陀の本弘誓願を、増上縁となづけたり

と讃述せられた。思ふに、「此和讃」は大師四帖疏中の三處より言を探り集めて、一首を構成せられたのである。佛法力不思議の言は、今いふよふに二河白道の譬喩の前に出てあり、諸邪業繫さはらねばの言は第三卷の「定善義」の念佛衆生攝取不捨の解釋に親縁近縁増上縁の三縁を明したまふ中の増上縁を示さるゝ中に見え、彌陀の本弘誓願を増上縁となづけたりとの言は、第一卷の「玄義分」に「彌陀の本願は凡夫の淨土に生るゝための増上縁なることを明したまふところより採りたもの。されば、凡夫が彌陀の光明に攝取せられて、煩惱惡業に碍られずして、能く淨土に往生して、法性の常樂を證ることは、是れ如來の本願力である。之を増上縁と稱し、佛法力の不思議と嘆じたので、而して凡夫が彌陀の本願力によりて、内外何れのものにも碍へられず、迷界より悟界に直入する深信の相狀を示されたのが、二河白道で、善導大師出世の功業は、此譬喩に盡されてある。宗祖聖人が、

法敬坊蓮如上人へ申され候あそばされ候御名號燒申候が六體の佛になり申候不思議なるこゝに申され候へば前々住上人そのこゝに仰られ候それは不思議にてもなきなり佛の佛に御なり候は不思議にてもなく候悪凡夫の彌陀をたのむ一念にて佛になるこそ不思議よ、仰られ候なり又曰く御普請御造作のこゝに法敬申され候なにも不思議に御誂望等も御上手に御座候由申され候へば前々住上人仰られ候我はなほ不思議なるこゝをしる凡夫の佛になり候こゝを知らる、仰られ候。

こいふこゝが載せてある。實にさうである。世間に出世間に通じて不思議の事も少くないが、凡夫の佛になるのが眞個に不思議で之を佛法力の不思議といふ『御文章』には、造悪不善の身ながら極樂の往生をこゝろをもて宗の本意をなす。こゝに仰せられてある。嗚呼吾人は今この佛法力不思議に遇ひ、已に不思議の利益を蒙れり、眞個に淨土眞宗の人になれり、慶喜せずしては居られぬで次第ある。(大正九年一月)

九如實修行

如實修行といふ言字は宗藏では七高僧の第二、天親菩薩の撰せられた『淨土論』の中に創めて出

で而して第三祖の曇鸞大師の之に就ての仔細な説明を得て、それよりこのかた、我宗祖聖人に至りて數々引用せられたのである。

抑『淨土論』の中に、西方淨土に往生せんこゝを期する願生の行者は、必ず五念門の行を修むべきこゝを示された。五念門の行といふは、一には禮拜で、身業に修むる行、二には讚嘆で、口業に修むる行、三には作願、四には觀察、五には廻向、この三四五の三は、意業の行の分別で、而して前の四は自利の行で、後の一は利他の行、則ち自利利他の二利、身口意の三業の行を分別して、往生を期する願生者の行法を示されたのが五念門であり、其中に如實修行の言字が出てをる。

五念門の第二の讚嘆門に、如是に言ふてある。

云何が讚嘆する口業に讚嘆する、彼如來の名を稱へて、彼如來の光明智相の如く、彼名義の如く、如實に修行し相應せん、欲するが故に。

こゝに、此は衆生が口業に南無阿彌陀佛といふ六字の名號を稱ふるを讚嘆の行と名けて、それに就て、如實修行相應といふ言字が出たのである。之を曇鸞大師が解釋して、

彼如來の名を稱へるこゝは、無碍光如來の名を稱ふるなり、如來の光明智相は、佛の光明は是れ智慧の相なり、此光明は十方世界を照したまふに障礙するもの有こゝなし、能く十方衆生の無明の黒闇を破る、日月珠光の但空穴中の闇を破るが如きに非るなり、彼名義の如く如實に修行し相應するこゝは、彼無碍光如來の名號は能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満足せしめ

たまふ此相應するを如實修行相應と名く、是の故に論主は建に我一心と言へり
 ミ云はれた。抑讚嘆門の行ミいふは、讚嘆ミはほむるミいふこと、如來の威神功徳をほめたてま
 つること、いふのである。而して口に六字の名號を稱ふるのが佛徳をほめたてまつる讚嘆行で
 ある。然れども、但口に稱ふるのみでは、讚嘆ミは云へぬ。其稱ふることが彼光明智相の如く彼名
 義の如く、如實修行相應でなくてはならぬ。それを曇鸞大師が示されて、無碍光如來の名を稱ふる
 ことなり、ミ云れたのである。その無碍光如來ミいふは、如何なることか、ミ云ふに、彼如來の光明は、
 能く衆生の無明ミいふ、心内の闇黒を破り除き、能く衆生の志願を満足せしめたまふ。之を光明智
 相ミいふ。これは佛體の徳用で、この體徳が全然六字名號の徳となりて、佛名が亦能く衆生の無明
 を破り、能く衆生の志願を満しめたまふ、之を名義ミいふ。これは、名號の徳用で、この妙義を名體不
 二ミいふのである。換言すれば、阿彌陀佛が能く迷倒の凡夫を生死界より救ひ出して淨土に往生
 し、法性常樂を證らしむる徳用を、光明智相ミも云ひ、名義ミも云ふ、此名義に隨順して稱念する稱名
 行を、如實修行相應ミ稱し、讚嘆門行ミ名くるミ示さるゝのである。

二

曇鸞大師は、如實修行の相を釋せんミして、不如實修行ミいふ似て非なる念佛者を擧げて、反對に
 之を示された。爰に一類の行者あり、南無阿彌陀佛の尊號を稱へながら、而も無明尙在りて、志願の
 未だ満足せぬ往生不安のものがある、これが即ち不如實修行で、名義に相應せぬ故である。而して

其實の如く修行せず名義に相應せぬ情相を叙べて、

如來は是れ實相身、是れ爲物身なることを知らず

ミいふてある。斯る念佛者は佛名を稱へながらも、其佛の自徳を全ふじて、衆生を攝したまふ神力
 を具ふる名義を存知せず、故に名號の實に契はぬで、不如實ミいふミ示さるゝのである。如實ミは、
 法體の實義に如同ふミいふこと、不如實は之に相應せぬのである。又其法體の實に稱はぬ相を
 示して、三不信なることを叙べて、

一には信心淳からず若存若亡するが故に、二には信心一ならず、決定なきが故に、三には信心相續
 せず、餘念間つるが故に

ミ云はれた。此淳からず一ならず相續せずミいふは、即ち天親論主の所云一心の缺けたるので、全
 く眞實の信心がないのである。それで、後に

此ミ相違せるを如實修行相應ミ名く、是の故に論主は建に我一心と言へり

ミ云ふてある。此は、如來が凡夫をこのまゝ救ひたまふことを存知せざるので、即ち信心がない、こ
 の信心なきが故に、佛名を稱へながら、往生が不安なるのである、之を不如實修行ミいふ。之ミ反對
 に迷倒の凡夫を、生死界より救ひ出して淨土に往生し、菩提の果を成ぜしめたまふミ信じて、念佛す
 るが、是れ如實修行相應で、之を天親菩薩は、『淨土論』の最初に、「我一心」ミ言へりミ云はれたのであ
 る。

我宗祖聖人は、『高僧和讃』の中に、此意を述べて、前に三不信の不如實相を讃じて、後に、
如實修行相應は 信心一つにさだめたり
と仰せられた。

三

宗祖聖人が、性信房に賜ひたる御消息の中に、

第十八の本願成就のゆゑに阿彌陀如來ならせたまひて、不可思議の利益きはまりましたまぬ
御かたちを、天親菩薩は、盡十方無碍光如來とあらはしたまへり、このゆゑに、よきあしき人をきら
はず、煩惱のこゝろをえらばず、へだてずして、往生はかならずするなり、と示るべしと云なり
と示されてある。此意は、煩惱成就の凡夫を攝取して、往生し成佛せしめんといふ、第十八の本願に
よりに取りたまへる正覺を、南無阿彌陀佛と名のらせられたのである。食暎煩惱心中に、能く信心
を發起して、生因を成じ、直ちに報土に生れて、大涅槃を證らしむる、不可思議の利益を施す其徳用を、
天親菩薩は盡十方無碍光如來と示したまふた。それであるゆゑ、善惡の凡夫が、煩惱に碍へらるゝ
ことなく、淨土に往生するのである。と示させられたものである。されば、出離解脱の大事に志しあ
らんものは、凡夫を攝めて淨土に生れしむる、彌陀如來の無碍光力を聽く時、信ぜずば止られまい。
即ち聞信の一念に往生安堵の心の發るは、是れ名願力に隨順するのである。故に宗祖聖人は信心が
是れ如實修行相應であるとして、天親論主の言ふ我一心といふが、それであることと示された。而して、

此一念が臨終まで延びて、多念に相續せらるゝが稱名であるから、稱名亦如實修行である。此稱名
の上に就て、如實修行相應の相を示さるゝものが、宗祖聖人御撰作の『一念多念證文』の稱名號の稱
の訓釋及び『行文類』の稱彼如來名の訓釋に見えてをる。『證文』に

稱は御名をこなふるこなり、また稱ははかりこいふころなり、はかりこいふは、ものゝほぎをさ
だむるここなり、名號を稱するここ、こえ、ひここえきくひここ、うたがふここ、ろ一念もなければ、實
報土へむまるこまふすここ、ろなり

と示されてある。稱名の稱をこなふるなりとのたまふは、これ稱の本訓でははかりなりとのたまふ
は、轉訓である。元來稱はこなふるこもはかりこも訓む字なれきも、稱名の稱は、勿論こなふると訓
むのであるが、それにははかりこ訓むとして、解釋せらるゝは、權衡を假りて、稱名の如實を知らせたま
ふ活手段である。權衡は物の斤兩を正しくする器械で、少しも物の輕重を欺かぬもの。衡はよく
物に隨ふて、輕ければ輕く、重ければ重く、眞個物の量に相應して、正しき量目を示すものである。今
此をもて、如實の稱名は、本願の名號に相應したる念佛なることを示さるゝので、如是な稱名は衆生
の口稱が全く是れ本願の名號で、願力の外はないのである。之を眞實の大行と名けられた。

或人は、如是な譬喩をもて、念佛の如實と不如實とを分別して聞かしてくれだ。演劇に木偶しば
い、千兩役者の本しばいがある。木偶しばいは、黒頭巾を被りた役者が、人形を使用するので、勿論
人形は美しく、衣裳も麗に、之が動作によりて劇を演せるのであるけれども、固より木偶のここなれ

ば、他に使用ふところの役者が要るのである。即ち役者の使用よふの巧み拙で、木偶の技藝に相違がある。して又役者はいかに巧者なるも、人形や衣裳が粗末では、観客の興味が出ないので、役者三人形、此二相須て、方めて演劇の價值があるのである。不如實の念佛は、恰も如此である。如來の名號は、徳を名に施すで、勿論福德聚で、善根功德の法體である。さりながら、之を衆生の口業に稱念せずば、木偶に等しく何等の功力もない、之を衆生が口業に使用して、方めて淨土往生の功用を生ず。衆生の之を口に稱ふるは、恰も役者の人形を使用して、木偶しばいの價值あるが如く心得てをるのである。千兩役者の本しばいは、役者自身が演劇をするので、他に黒頭巾の使用者は要らぬ、他の助力を須たす、役者自身が全分功用するのである。如實の念佛者の心得も亦この通りである。たごひ口に稱名してをりながらも、自の稱へた功力で往生するは、微塵も認めず、名號能く衆生を攝して畢竟淨に入らしむ、唯名願力の妙用を仰いで、其偉大の恩徳を吹聴するのである。宗祖聖人の教へたまふ本願の名號は、千兩役者の演劇の如く、餘宗の人の勤むる念佛は、木偶演劇の如し、千兩役者の如き名號なれば、信する外なし、後々に稱名するは、唯信心の相續なるのみ、豈平生業成ならずではかなはぬ。木偶の如き名號なれば、稱へて一形を期せねばならぬ、臨終業成は亦止むを得ぬ次第である。巧譬々々、如實不如實、相違の分齊大にして考察みねばならぬ。

四

覺如上人の物せられた『執持鈔』の中に宗祖聖人の御言として、

本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願

といふが引證せられてある。此は御言は至りて簡短なるが願力相符機法一體の光景は、此數言に盡きてある。拜讀する毎に、他力攝生凡夫直入の眞宗、手に取るの心地せられ、眞個にありがたいこと限りがない。凡夫入報の本願を發し、此願成就して正覺を取りて南無阿彌陀佛三名のり、佛名よく煩惱に碍へらるゝことなく、凡夫を攝取す、實にこれ本願や名號、名號や本願である。已に如是願力を聞く、信ぜずばあるべからず、又稱へずばあるべからずである。信するは稱ふるは、衆生の稟受のこみなれども、信じて信功なく、稱へて稱功なし、唯願力にし乗托たる相のみ、されば衆生の信する稱るは、全く是れ佛願力が衆生を攝取して畢竟淨に入らしむるのである。之を本願や行者、行者や本願、と示されたのである。

おうと呼び、あうと答ふる山響の

答ふる聲は呼ぶ人の聲

で、眞にこれ他力である。

嗚呼、久遠劫來、長時永劫夢中に生死を輪回せし吾人が、何の幸ぞ、今次始めて徹底的に夢中より覺め來りて、順次生に淨土に入りて、無上菩提を證し、横に十方に遍く、豎に三世を貫く身となるのである。偏へにこれ凡夫攝生の願力の恩徳である。已に信じ已に行じつゝ、如實修行の身となれり。爾れば之を擴充して、人生に處する上にも、如實修行の功用を顯示して、佛祖の遺弟たる面目を發揮せ

ねばならぬ。世人皆社會改造の要を叫びつゝある今時、佛子に須つものも多大である。如實修行の者、今時特に一段の努力を要するのである。

南無阿彌陀佛、く、く。 (大正九年一月)

十 眞宗の教行信證

一

我淨土眞宗は親鸞聖人御體驗の法門で。その御體驗のやうを披瀝して末世有縁の吾人に共鳴を促し、その所信の淨土眞宗に歸入せしめんを欲して、御製作下されたものが『教行信證文類』といふ六卷の書である。本願寺第三世の宗主覺如上人は、其製作せられた『教行信證大意』に、先づ淨土眞宗は親鸞聖人の御開宗であることを示して、

當流聖人の一義には教行信證といへる一段の名目をたて、一宗の規模としてこの宗をばひらかれたるごころなり。このゆゑに親鸞聖人一部六卷の書をつくりて教行信證文類と號してくはしくこの一流の教相をあらはしたまへり

と云ひ、次に六卷の綱目を標列して、

第一卷には眞實の教をあらはし

第二卷には眞實の行をあらはし

第三卷には眞實の信をあらはし

第四卷には眞實の證をあかし

第五卷には眞佛土をあかし

第六卷には化身土をあかされたり

と云ひ、それより右の次第を逐うて各卷の要旨を述べて、後に

さればこの教行信證眞佛土化身土の教相は聖人の己證當流の肝要なり

と結んである。されば、聖人の御己證即ち御體驗の法義は『教行信證文類』六卷によりて、大方に宣示せられたので、六卷の御製作が是れ御一宗の開闢だといふ譯である。仍て『教行信證文類』六卷が一宗の根本聖典で、生きた生命であるゆゑ、由來崇敬して『御本典』と稱して居る。この外に尙漢文のものに三部、和文のものに五部の御製作がある。就中『三帖和讃』はその組織内容が殆ど六卷の『御本典』と同じやうであるので、假名の御本典とまで尊稱した學者もあるが、その他の諸部は、或は文類六卷の肝要を摘示せられ、或は特に一部分の義を釋明せらるゝのでありて、いづれも文類六卷の註解に外ならぬ。故に聖人御己證の法義の遺る所なく宣明せられたものは文類六卷の『御本典』である。

『教行信證文類』六卷の御本典御製作の年時は何年であるかといふに、それは聖人は明記されて

ない。聖人の餘部には、御製作の年時を、聖人の尊諱や御年齢までも、詳記せられたものもあるが、この『御本典』にはそれが無い。尤も「愚禿釋親鸞」か、「愚禿鸞」か、いふ尊諱は、六卷の諸處に拜見するも、御執筆の年時は別記してないが、幸に第六卷の中ごろに左の御文がある。

如來般涅槃の時代を勸ふるに、周の第五の主穆王五十一年に當れり。其壬申より我元仁元年甲申に至るまで二千一百八十三歳なり

この御文は、前後の文勢より見れば、今時はこれ末法濁亂の世であることを示されたのであり、固り御製作の年時を示されたのではないが、文中の所謂元仁元年は、正に第六卷の最後の御製作年時であることを證明するものである。猶全部完成するまでには、これより猶紙數四十餘枚もあるので、果して同年内に完結したか、又翌年に移りて脱稿したかは、審でないが、まづこの歳をもて完成したものと見て、この歳をもて『教行信證文類』六卷の御製作完成の年時と定めてみれば、随つて浄土眞宗の我日本帝國に開宗せられた紀辰とすることができるのである。

元仁元年甲申は、後堀河天皇八十六代の聖代で、聖人の御年は五十二で、常陸國稻田郷の御住居のときである。この元仁元年をもて眞宗の世に開けた紀辰として、それより算へ来るに、今茲大正十二年が正に七百年となるのである。されば、遺弟たるの光榮を荷ふ吾人は、僧俗の別なく男女を謂はず、各自に十分の懇念を抽んで、七百年前の聖人の當時に還元し、聖人の御本意に副ふやう、奮勵努力せなくてはならぬ。特に方今世界思潮の趨向として、聖人は時代の流行兒のやうに、各階級の

多數の人にもてはやされたまふが、その多くは、誤解され侮辱されたまふたやうな状態である。之を是正して聖人の眞面目を明かにし、之を導きて聖人の眞信仰に歸入せしむるものは、たしかに吾人が聖人の御恩に感謝するの唯一の務めである。其は聖人の信仰を發表せられたる『教行信證文類』六卷の御意趣を體現するより外はないのである。

『御本典』の中には、眞宗の教行信證といふ御文があり、又眞宗の教行信證といふ御言もある。古來の學者が教行信證を三法と稱し、教行信證を四法と言ふて、或は三字をもて或は四字をもて顯示せらるる祖意を攻究したこゝである。かやうな三法と四法は、同じくこれ眞宗を顯はすの法である。故に法に三四の別あるも、御體驗の眞宗を顯示せらるゝこゝは即ち一である。教行信證といふ三法の時は、信の一行の中に攝まり、教行信證の四法の時は、信は行の法より開いたので、但是れ開合の別なのである。さてこの三法四法は、聖人の創意ではない、聖道門の人師は已にこの言がある。聖人はそれに倣ふて、以て御體驗の眞宗を顯示せらるゝのである。彼には三法は同じく教行信證であるが、四法は教理行果である。それを聖人は教行信證と改められたのである。教行信證又は教理行果、いづれも皆轉迷開悟の行者趣入の次第を示す法目なのである。それで聖人は之をもつて聖道門また浄土の方便假門の自力に簡んで、浄土眞宗の絶待他力の法を示さるゝのである。されば教行信證若くは教行信證標語は彼此相通じて、内容は則ち大に別なのである。此より其格別なる眞宗の教行信證の意義を釋くであらう。

前に云ふやうに教行信證の三法また教行信證の四法は、衆生の轉迷開悟の趣入の次第を示すのである。其教こいふは諸佛の言教で、十方の諸佛が彌陀法を説いて、淨土往生を勧め、轉迷開悟の大事を成就せしめたまふ教こ化をいふ。第十七の願に十方恒沙の諸佛に、我名號を咨稱られんこ誓はれた。其願すでに成就して諸佛が十方世界に到る處で往生淨土の法を説きたまふ。即ち此娑婆界に於て釋尊が『大無量壽經』を説いて、彌陀名號を信ぜしめて、淨土に往生せしめたまふが、この教こなのである。この外に『觀無量壽經』と『阿彌陀經』とありて、之を略して觀經小經こ稱し、之に對して『大無量壽經』を大經こ略稱し、之の大觀小の三經を淨土三部經こ稱する。こころが觀小の二經には、二様の伺ひかたがありて、其一邊は要門眞門こいふ淨土の方便である、自力往生を説かるゝので、この時は大經こは別なのである。其一邊は大經こ同じやうに本願眞實の他力往生を説かるゝ、こいふのである。それで淨土三部の中で、大經をもて眞實教こして、大經の説をもて眞宗こせられたのである。抑釋尊の御一代を三十成道八十入滅こすれば、御說法の時間が五十年である。此間に大經の八萬四千の諸法門を説かれたのである。然るに聖人大經が出世本懷の説で、餘他の諸經は月待つまでの手づさみの風情で、大經を説かための方便の説であるこ言はれてある。此意よりすれば、大經が根本法輪で、一代說法大經已外の半滿權實の諸教は、すべて皆枝末の説法である。換言すれば釋尊は大經を説いて、淨土に往生せしめんこ欲して、此土に出現せられた。即ち本願成

就の彌陀如來の使命により此土に出現したまふたが釋尊である。大經がその使命の説法であるこ伺はれたので、教こいふは即ちこの大經の説法である。

三

次に行こいふは、南無阿彌陀佛の名號の謂で、前の教即ち釋尊が大經に説き詮された法體で、衆生信仰の對象である。第十七の願に、十方諸佛に我名を咨稱られんこ誓はれた。我こあるのが、南無阿彌陀佛で、第十八の願に乃至十念こあるの法體である。行こは又業こもいふ。即ち行業である。元來歩行こも行動こも進行こも熱字で、努力するそれが因こなりて、果に向ふて進行する。即ち效果の現はるゝ、だけの努力修行を行こいふ。佛教のすべてに願行こいふ行こがそれで、願は向上の志望で、其志望を遂げ果てんこして努力修行するそれを行こいふ。即ち止惡作善して、菩提の極果に進趣する努力が行こである。願は能く行を導き、行は能く願を滿たして、菩提の果が現るゝ。故に菩提の果を尅す因法は願こ行こである。而して正因を的示するこきは、願行の中に於て特に行を以てするのである。然るに吾人凡夫は、徹底的に妄念煩惱を斷ずる行が不可能ぬ。煩惱が斷ぜられねば惡業が息まぬ。惡業が息まねば生死は絶えぬ。生死を出づるこきが不可能なれば菩提を得るの清淨眞實の行の成就するこきは絶望である。聖人の御言に

いづれの行もおよびがたき身なれば、地獄は一定すみかぞかし

とあるがそれである。こころがこの行の不可能なため生死を出るこのならぬ者を哀れみたま

ふ大悲心よりして、我れたすけん。發願されたが法藏菩薩である。聖人の又の御言に
 煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなる、ここあるべからざるをあらはれみたまひ
 て、願を、こしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人も、こも往生の正
 因なり

こ仰せられてある。而して五劫に思惟し永劫に修行して成就せられたるが、南無阿彌陀佛である
 から、吾人凡夫を救済せん。こして成就した正覺の果號は、即ち凡夫往生の行である。「安心決定鈔」に
 まこに往生せん。こおは、衆生こそ願をもこし行をもはけむべきに、願行は菩薩のこころ
 にはけんで、感果はわれらがこころに成す

こ示されたがこの意である。即ち彌陀成佛の願行そのま、衆生往生の願行こなるので、正覺の果
 號南無阿彌陀佛は、實に衆生が往生し成佛する所の願であり行である。されば吾人凡夫は往生し
 成佛する一大事件に就ては、毫末も自己の思想や行爲は之に交渉するこなく、即ち三業の上に行
 を修する必要なく、佛名號の力用によりて佛果に進趣むのである。「安心決定鈔」に

衆生の三業は能乘こなりてうへにのせられ、彌陀の願力は所乘こなりてわれらが報佛報土へ生
 すべきのりものこなりたまふ、かるがゆるに歸命の心本願に乗じぬれば、三業みな佛體にもたる
 さいふなり

こも、又

弘願正因のあらはれもてゆくなれば、佛の願行のほかには別に機に信心ひこも行ひこもく
 はふるこはなきなり

こ言ふてあるがこの意である。衆生が眞實報土に入りて佛果を證るこ、全く名號の獨用で、衆生
 は無作である。是に於て名號そのものを行こ名づけらる、祖意が明了るのである。これが普通
 佛教に於て衆生三業の造作を行こ名づくるもの、大にその趣きを異にするのである。同じく京
 都に至るも、徒歩苦行によりて進趣る、船や車に運載りて到達るこの別がある。自力の徒歩、他
 力の運載、事相は大いに異なるも、進到くこは則ち同じ。名號を行こ名づけたまふものこの意で
 ある。思ふに、此が確かに親鸞聖人が體驗せられたる信仰の事實を語る、ので、己れを忘れて願
 力に乗せられたる身は、日夜常時に淨土に向ふ道程を一步一步こ進行しつ、ありて、それを少しも
 自己の功は考へられず、全く運載ぶ佛願の功に歸して、たはれ、こ名號の獨用を仰がれたの
 である。名號を行こ名づくるは全くこの信仰から出て來ておるので、眞個に他力義に徹底せられ
 たる聖人已證の御宣示である。

四

次に信。こいふは、阿彌陀佛の攝受衆生ふ願力をたのみて疑ひなき心をいふ。第十八の願に「至心
 に信樂して我國に生れん。こ欲して乃至十念せん。こある。あの至心に信樂して我國に生れん。こ欲
 して。こあるを聖人は之を至心。こ信樂。こ欲生。この三心。こ稱せられた。之を釋尊の述成に、聞其名號

信心歡喜。説かれたによりて何へば此心は諸佛の言教に詮顯せられたる彌陀名號の義意が衆生心中に聞得せられたる受法の心相である。覺如上人の「四法大意」には

第三に眞實の信といふは、上にあぐるころの南無阿彌陀佛の妙行を、眞實報土の眞因なりと信する眞實の心なり

と云ふてある。攝取の願力をたのみて疑ひなき信心が淨土の果に望みて正因と云はるゝ所以は、元來衆生の往生すべき因法たる願行は、已に彌陀如來の方に成就して、南無阿彌陀佛の名號となりてある。即ち名號に衆生を攝取して、淨土に往生せしむる力用がある。斯名號の義れを聞信する端的に、佛成就の願行が全然衆生の有となりて、往生し成佛する因となるのである。「聞其名號信心歡喜」説かれたがこのこゝである。それで信心と名號とは、衆生の上に於ては一體不二で、信心の外に名號なく、名號の外に信心はない。故に名號に救はるゝといふも好し、信心によりて往生するといふも好し、唯一の事實を機法の兩面より詮表すに過ぎぬ。即ち法より云へば名號正定業で、機より云へば信心正因である。藥は毒を滅す功能がある。之を服用すれば病を治することを得る。乃ち病の癒るは、藥の效力とも云ふべく、又服藥によるとも云ふべし。服藥せるに因ることも、服用する造作は功はない。藥の體內に入りたるが、病の癒るの因となつたので、仍り藥の功を語るに外ならぬ。名號正定業と、信心正因との關係も、亦例して知るべきこゝであるが、機受の肝要なことを示して、信心正因を高調せられ、それよりして、信と證と直接して、行信證と次第せられたものである。

る。

五

南無阿彌陀佛の名號は、衆生往生の行として成就せられたるが、衆生の之を受くる全相を云はゞ信すると稱ふるこゝである。稱ふる念佛は亦これ行であるから亦信と行といふてある。それで行には信の前にありて行。信と云はるゝと、信の後に在りて行。行と云はるゝと、信の二の別がある。體は一の他力行であるが、分齊が別である。行信の行はこれ名號であり、信行の行は即ち稱名である。本願に至心に信樂して我國に生れんと欲して乃至十念せんといふは、衆生が信心治定の後に念々相續する稱名の行である。こゝろが信心と稱名と同じく名號が衆生に受けさられた相なるも、信心は初起の一念で、この一念に佛徳を全領して、往生の因が満足するで、その後の稱名は、只是れそれを相續するので、聖人は之れを多念と稱せられた。この多念の稱名行は、すでに信の相續であるから、當來の果に向ふて進む行業ではない。唯だ是れ大悲を讃仰して感謝の誠意を表する造作なのである。餘他の宗にいふ所の行は、當果を尅む造作の行であるも、弘願眞宗の稱名行は、生因満足の後の造作であるで、果に向ふて進む義れがない。それで信心正因の名に對しては、稱名報恩といふ名をもて、別途の信行なることを示された。抑信心正因稱名報恩の義は我が聖人が彌陀本願の深旨に徹底せられた御體験の法門で、信心正因が確立すれば、自然の結論として稱名報恩の義は成立せねばならぬ筈である。一毫未斷の凡夫が、直ちに眞實報土に入りて、無上の

極果を證るこゝは、全く是れ彌陀願力の大用で、それを信する一念に往生が決定するからは、信後百般の所作は果に向ふて進むに於て、妨げともならず、又助けにもならず、それで上盡一形相續する稱名は、大悲の佛恩を感謝する外に、他に使用する念慮はすこしも之あるべき筈はない。故に稱名報恩といふ斷案が下るのである。

稱名は已に感謝報恩の行であるから、有無多少の制限のあらう筈がない。故に之れ多きも功あるでなく、之れ少きも足らぬでなし。將た全く之なくとも往生に障はない。有無を問はず、多少を論ぜず、此處に報恩行の報恩行たる所以があるのである。即ち安心して懇念を運ぶのである。第十八の本願に十念の稱名行に乃至の字を冠らしたるが、即ちそれを示したもので、聖人は釋して乃至十念こまふすは、如來のちかひの名號をこなへんこまをす、めたまふに、遍數のさだまりなきほごをあらはし、時節をさだめざるこまを、衆生にしらせんこおほしめして、乃至のみこまを十念のみなにそへて、ちかひたまへるなり〔銘文〕

こ仰せられてある。乃至は不定の辭で、この不定の辭を十念に冠らせたるが、修行の長短にも遍數の多少にも拘はらぬこまを示すので、この意義を推し擴むれば、有無不定までにも歸着せねばならぬ。即ち正因満足安心定得の上の報恩の行たる意趣が伺はれる。若し信する一念に正因が未究竟なれば、稱名はその缺少を補充せんが爲の行となりて、自から生因の補足に擬れて、純一報恩の義が成立たぬ。随つて少しにても稱ふる功をつのるこまあれば、信心が亦獨立して生因となる義が

成り立たぬ。信心が生因ならざれば、如來の救済が徹底せぬ。それでは他力運載の絶待他力即ち先きに云ふ名號を行。こ名づけられたこまは成り立たぬこま、なる。否々。已に衆生の往生は、行こまはる、名號の獨用であるからは、衆生は唯信するのみ、唯信する處に往生は決定するのである。されば信心は正にこれ正因である。信心正因なるゆゑに、稱名は能く報恩なるこまをうる。稱名報恩なるがゆゑに、信心が能く正因なるこまをうる。信心こ稱名こは、正因こ報恩こ、各々其の分を守りて相混亂せぬ、是に於て、絶待他力の彌陀の願意が明かに體驗せらるゝのである。

六

後に證。こいふは、彌陀の淨土即ち西方の安樂國に往生して現はるゝ所の大般涅槃の極證をいふ。「涅槃の眞因は唯信心を以てす」こある信心の因によりて得る所の果である。覺如上人の「教行信證大意」の中に

眞實の證。こいふは、さきの行信によりてうるこころの果、ひらくこころのさきりなり、これすなはち第十一の必至滅度の願にこたへてうるこころの妙悟なり、乃至、されば往生こいへるも實には無生なり、この無生のこまはりを安養にいたりてさきこるべし、そのくらゐをさして眞實の證。こいふなり

こある。されば信心の行者が淨土に往生して得る所の證。果は、第十一願力の所成であるで、全くこれ彌陀の廻向法即ち他力である。聖道門の人師は、或は彌陀の淨土を高く判じて報佛土こなす。

それで凡夫は生ぜず。凡夫の生ずるさあるは方便説で、其實は往生せず、報佛土であるから云ひ。或は凡夫は實に往生する、それで所生の淨土は極めて卑い。故に往生するも成佛するこゝは生後の修行による。猶多劫の後を期す云はれた。かやうに所入の土に能入の人、其説は大いに異なるも、理義は是れ一で、凡夫は劣土に生まれ、聖者は勝土に入るさするのである。これは修因感果の常規に執はれて、因果皆願力廻向の別格な眞宗を知らざるからである。若不生者不取正覺の誓ひ空からず、佛正覺の擧體が衆生の往生法となり、衆生が攝受衆生の願力を信するこゝろに、佛徳が全領せられ、佛因満足して、正定聚に入る。それでうるこゝろの往生は、往生する時は即ち成佛するのである。此事實は、但超世の願意に體達するものゝみ能く高唱するのである。聖人が眞實信心をうれば、實報土にむまるさおしへたまへるを、淨土眞宗とすこしるべし〔文意〕

と仰せられたは、實にこのこゝろである。彌陀の本願力を信するもの能く眞實報土に生れて成佛する。之が淨土眞宗の大益である。之を説きたまへるものが釋尊の大經で、この大經の佛意に徹底し信解して高唱せられたるが我親鸞聖人である。その御已證の當來の證果を難思議往生とも云はれ、無上涅槃の極果とも示さるゝのである。

七

御本典の第一「教文類」の劈頭には

謹んで淨土眞宗を案ずるに二種の廻向あり、一には往相、二には還相、往相の廻向に就て眞實の教

行信證あり

と云ふてある。往相とは、吾人凡夫が此三界より彼淨土に往生して轉迷開悟するこゝろ。還相とは、淨土に往生して後に、他の十方一切衆生を自分と同じやうに轉迷開悟せしめんため、此三界に還り來りて教化に従事するこゝろ。これが皆彌陀願力の活用力である。それを廻向といふ。教行信證はその此世界より彼淨土に往生する因果の次第を知らしめられたので、此は吾人が如來の願力によりて得させていたゞく自得である。こゝろが淨土に往生して成佛すれば、自利の大智が満足するこゝ同時に、一切衆生を教化する利他の大悲が起る。之が還相である。還相は別して第二十二願力によりてうるのであるが、第十一願力によりてうる所の涅槃の悲用で、往生の證果の外のものではないのである。されば往相の自身の願望満足するときは、一切衆生を利益する還相も成就するのである。之が他力眞宗の他の諸教に類例のない大利益である。

右のやう往相還相。往相の教行信證。すべてこれ吾人凡夫が阿彌陀如來の本願力に救はれて轉迷開悟の大事を成就させていたゞく大利益である。之が淨土眞宗である。此は我親鸞聖人の體験せられた宣示でありて、吾人も體得せらるゝ大利益である。眞個の法界唯一の妙法である。吾人は今たしかに之を味識し體得させていたゞいたので、眞にこれ無限の幸福である。本年は御開宗已來七百年で紀念すべき良辰である。今その年頭に於て、右教行信證の大意を略解して、有縁の法兄弟に同一の法悦味を分つこゝろは、何といたありがたいこゝろであらうか。嗚呼有り難い、眞

にこれあり難い。南無阿彌陀佛、く、く

(大正十二年一月)

一一 親鸞聖人の御持言

我宗祖親鸞聖人は嘉禎元年の秋御年六十三にして、關東の經回より引上て、京都に歸らせられ、滿九十年まで洛中諸處に移住しつゝ、來問の善男女に御己證の眞宗法義を語りて、其餘生を送られた。御歸洛前に於いて、常州稻田の草庵に御逗留中に、「教行信證」を稱ふ一部六卷の著書が脱稿した。即ち元仁元年御年五十二の歳である。此は其御己證の淨土眞宗を宣示せられたもので、聖人の遺弟は、之を眞宗の御本典と尊稱し、聖人信仰の全分がこの御本典に存するとして、生ける聖人に心得て尊重し拜讀して居る。

御歸洛後に於ては、幾多の漢文和語の御著述がありたが、其尤も早きものが「三帖和讃」の中の前二帖、即ち「淨土和讃」「高僧和讃」で、寶治二年七十六歳に脱稿して、建長六年八十二歳の時に清書されたといふ。第三帖の「正像末和讃」の御製作年時は不分明であるが、八十三歳以後であることは疑もないやうである。又「淨土文類聚鈔」「愚禿鈔」「入出二門偈」や、「三經往生文類」「尊號眞像銘文」「一念多念證文」「唯信鈔文意」「往還廻向文類」などは、皆是れ八十三歳以後の御著述である。此外に

『末燈鈔』や『御消息集』に載せられた御己證の斷簡や門侶への御消息の、今日に拜讀し得らるゝものは、多くは御晩年の文筆で、即ち七十八九歳已後のものである。而して此等晩年の御文筆の中で、尤も屢々御繰回へしになりて、目立つて拜讀さるゝものが、義なきを義、すこの御言である。これはたしかに聖人の御持言の一つでありたやうである。今はこの義なきを義、すこい御持言に就て、聖人の御己證を伺ふのである。

二

今まで發見せられ公表せられたる聖人の御文筆で、義なきを義、すこの御言の最も古きものは、高田派本山に秘藏せらるゝ、こいふ聖人より御息女覺信尼へ贈られた御消息である。至りて短きゆゑ、全文を掲ぐるであらう。

御文くはしく承り候、わざも申入るべく候に、かたみこ御望み候ゆゑ、四十八の御願文にしへの夢の御文もを書いてまいらせ候、いきて候へばまた對面候てしかる、申まいらすべく候、何事も疑なく御安心たぢろが、せたまはで御念佛せさせ候よし、めで度事にて候なり、他力には、義なきを義、すこは申候なり、只々御はからいなく御本願にまかせ、いよく御念佛候べし。

かへす。

南無阿彌陀佛。

四月五日

親 鸞(華押)

一〇 親鸞聖人の御持言

右の御消息の中にいにしへの夢の御文にあるは、同じく高田派本山に秘藏せらるゝ、「親鸞夢記」をさすのであらう。

すれば四月五日の日付は、建長二年で、聖人七十八歳の御筆である。こゝが知らるゝのである。次に年月日の明了なるものより順次に擧ぐれば、『末燈鈔』の第二章に云く、

かさまの念佛者のうたがいとわかれたる事。それ淨土眞宗のこゝろは往生の根機に他力あり自力あり、このこゝろすでに天竺の論家淨土の祖師のおほせられたるこゝろなり。まづ自力を申すこゝろは、行者のおのゝ縁にしたがひて、餘の佛號を稱念し、餘の善根を修行して、わが身をたのみわがはからひのこゝろをもて、身口意のみだれごゝろをつくろいめでたうしなして淨土へ往生せんごおもふを自力を申候なり。また他力を申すこゝろは、彌陀如來の御ちかひの中に選擇攝取したまへる第十八の念佛往生の本願を信樂するを他力を申すなり。如來の御ちかひなれば他力には義なきを義とす。聖人のおほせごゝろにてありき。義といふこゝろははからふこゝろばなり。行者のはからひは自力なれば義といふなり。他力は本願を信樂して往生必定なるゆゑにさらに義なしごなり。しかればわが身のわるければいかでか如來むかへたまはんごおもふべからず。凡夫はごより煩惱具足したるゆゑにわるきものごおもふべし。またわがごゝろよければ往生すべしごおもふべからず、自力の御はからひにては眞實の報土へむまるべからざるなり。

行者のおのゝ自力の信にては、懈慢邊地の往生胎生疑城の淨土までぞ往生せらるゝ、こゝろにてあるべきごぞうけたまはりたりし。第十八願成就のゆゑに阿彌陀如來ごならせたまひて不思議の利益きわまりましまさぬ御かたちを天親菩薩は盡十方無碍光如來ごあらわしたまへり。このゆゑによきあしき人をきはす煩惱のこゝろをえらばすへだてずして往生はかならずするなりとしるべし。カ至。これさらに性信坊親鸞がはからひ申すにはあらず。ゆめく。

建長七歳乙卯十月三日

愚禿 親鸞 八十三歳

又『末燈鈔』第五章に云く、

自然といふは、自はおのづからといふ、行者のはからひにあらずしからしむといふこゝろばなり。しからしむといふは、行者のはからひにあらず如來の御ちかひにてあるがゆゑに。法爾といふは、この如來の御ちかひなるがゆゑに、しからしむるを法爾といふなり。法爾はこのおむちかひなりけるゆゑに、をほやす行者のはからひのなきをもてこの法の徳のゆゑに、しからしむといふなり。すべて人のはじめてはからはざるなり。このゆゑに義なきを義とす。としるべしごなり。自然といふはごよりしからしむるといふこゝろばなり。彌陀佛の御ちかひのもごより行者のはからひにあらずして南無阿彌陀佛ごたのませたまひてむかへんごはからはせたまひたるに、よりて行者のよからんごもあしからんごもおもはぬを自然ごはまふすごごきゝて候。カ至、この道理をこゝろえつるのちには、この自然のこゝろはつねにさたすべきにはあらざるなり。つねに

自然をさたせば、義なきを義とすといふことはなほ義のあるになるべし。これは佛智の不思議にてあるなり。

正嘉二年十二月十四日

愚禿 親 鸞 八十六歳

文明五年三月蓮如上人開版の『三帖和讃』の終りには、「親鸞八十八歳御筆」としてこの文が載せてある。

また『末燈鈔』第六章には「義なきを義とす」とは無いが、同じ意味のお示しがある。

なによりも、ごごころし、老少男女、おほくのひまゝの、死あひて候らんごごころ、あはれに候へ。たゞし、生死無常のごごころは、くはしく如來のまきをかせおはしまして候うへは、おごろきおほしめすべからず候。まづ善信が身には、臨終の善惡をばまふさす。信心決定のひまは、うたがひなければ、正定聚に住するごごころにて候なり。さればこそ、愚痴無智の人も、をはりもめでたく候へ。如來の御はからひにて往生するよしひまゝにまふされ候ける、すこしもたがはず候なり。ごごころをののに申しさふらひしごごころたがはずこそ候へ。かまへて學生沙汰せさせたまひさふらはで往生をまけさせたまひさふらふべし。故法然聖人は、淨土宗の人は愚者になりて往生す、ご候しごごころをたしかにうけたまはりしうへにも、ものもおほえぬ、あさましきひまゝのまいりたるを御覽じては、往生必定すべしとてえませたまひしを、みまいらせさふらひき、文沙汰してさかゝしきひまのまるりたるをば、往生はいかゞあらんすらん、たしかにうけたまはりき。い

まにいたるまでおもひあはせられ候なり。ひまゝにすかさされさせたまはで御信心たちろがせたまはずしておのゝ御往生候べきなり。たゞし、ひまにすかさされさせたまひ候はずごも信心のさだまらぬ人は正定聚に住したまはずして、うかれたまひたる人なり。乗信房にかやうに申し候やうを、ひまゝにも申され候べし。あなかしこゝ。

文應元年十一月十三日

善 信 八十八歳

乗 信 御 房

又『末燈鈔』第七章の終りに

また他力ごまふすごごころは義なきを義とすごまふすなり。義ごまふすごごころは行者のをのゝのはからふごごころを義と申すなり。如來の誓願は不可思議にましますゆゑに佛ご佛ごの御はからひなり。凡夫のはからひにあらず、補處の彌勒菩薩をはじめとして佛智の不思議をはからふべきひまは候はず。しかれば如來の誓願には義なきを義とすごごころは大師聖人のおほせに候き。このごごころのほかに往生にいるべきごごころ候はずごごころえてまかりすぎ候へば、ひまのおほせごごころにはいらぬものにて候なり。

二月二十五日

親 鸞

淨 信 御 房

ごある。この御筆の年時は不分明である。

また『末燈鈔』第九章の端書に云く、
他力には義なきを義すすこはまふし候なり。

『御消息集』の第十一章慶西坊宛の御消息に、年號の記録はないが後半に左の御文がある。
また彌陀の本願を信じさふらひぬるうへには、義なきを義すすこそ大師聖人のおほせにてさ
ふらへ、かやうに義のさふらふらんかぎりは他力にはあらず、自力なりきこえてさふらふ。ま
た他力さまふすは、佛智不思議にてさふらふなるまきに煩惱具足の凡夫の無上覺のさこりをえ
さふらうなるまきをば、佛の御はからひなり。さらに行者のはからひにあらずさふらふ
しかれば、義なきを義すすこさふらふなり。義さまふすこは自力のひまのはからひをまふす
なり。他力にはしかれば、義なきを義すすこさふらふなり。
已上は覺信尼へ遣された御消息の序に『末燈鈔』に『御消息集』に載せられたる義なきを義す
る御言を擧げたのである。

三

更に御撰述に就て伺ふに、建長七歳六月二日に脱稿した聖人八十三歳の御著述の『尊號眞像銘
文』に

横超といふは、横は如來の願力他力をまふすなり、超は生死の大海をやすくこえて無常大涅槃の
みやこにいるなり、信心を淨土宗の正意としるなり。このころをえつれば、他力は義なきを

義すすこなり。義といふは行者のはからふこなり、このゆゑに自力といふなり。

と云ひ。又『正像末和讃』には

聖道門のひまはみな、自力の心をむねとして、他力不思議にいりぬれば、義なきを義すすこ、信知せ
り

と讃述せられてある。『正像末和讃』の御製作年時は不明にして異説あるも、八十三歳已後なるこ
まは疑ひない。

已上は聖人の御文筆の中に於て、義なきを義すすこの御言の今日に拜讀し得らるゝものであり
て、合計九文である。而して『歎異鈔』の第十章に

念佛には無義をもて義すす、不可稱不可説不可思議のゆゑに、まおほせさふらひき

と云ふてある。『歎異鈔』の著者に就ては、如信上人とか覺如上人とか、又唯圓房なりと云ふ異説ある
も、いづれにしても聖人御晩年の隨聞を筆録して異義を批判し糺斷するの基調をなしたものであ
る。これで左右に伺候する門侶に對する御法談にも、義なきを義すすこの御言のありしこまが偈
ばるゝ。

爾れば、義なきを義すすこいふ聖人の御持言は専ら御晩年に於てのこまなるやうが拜察さるゝ
のである。

四

而してこの義なきを義すこの標語は、御消息の中に「大師聖人のおほせにてさふらへ」も「聖人のおほせごこにてありき」もある御言によりてみれば、恩師法然聖人より傳持されたもので、親鸞上人の創造ではないのである。然るに法然聖人の御著述である「選擇集」にはこの御言はない。又浄土宗鎮西派より出せる『漢和語燈錄』にも見出せないに、但鎮西派本山知恩院に秘藏せる『護念經』の奥書に左の如き法語があるといふ。

浄土宗安心起行の事義なきを義し様なきを様す、淺きは深きなり、只南無阿彌陀佛を申せば、十惡五逆も三寶滅盡の時の衆生も、一期に一度善心なきものも決定往生遂ぐるなり、釋迦彌陀を證す。

建曆二年正月二日

源 空

又洛東西山派本山禪林寺には、派祖西山上人の筆寫されたもので、法然上人が熊谷蓮生房へ賜はりたご傳ふる消息がある。それは右の『護念經』の奥書におなじもので、但初めに「熊谷蓮生入道へ返答」を標し、本文では「三寶滅盡の時の衆生も」の次に「西東わきまへぬものも」も「いふ一句が加へられてあるといふ。そして終りには「建仁二年正月二日」を記してあるのが相違である。建仁二年は、蓮生房の死前六年で、親鸞聖人三十歳の年であり、建曆二年は法然上人がこの歳の正月二十五日に入寂せられたので、親鸞聖人は正に四十歳である。而して親鸞聖人が法然聖人の門に入りたまひしは二十九歳で、三十五歳には越後に流謫されて、それより恩師法然聖人には復見へたまはざりし。

爾れば義なきを義すこの恩師の御言は、二十九歳より三十五歳までの間に於て拜聽し深く敬服せられたものである。

五

さて義なきを義すといふこは、いかなる意義かといふに、聖人みづから解釋されたやうに、義とははからひといふこである。字典にも義は宜しきに隨ふて物を制裁するこゝろなりといふ。是非善惡を分別して正道を履行するこで、世に筋道正しきを正義といふ。是義は理智を本とするよりして「はからひ」を和解されたのである。即ち理智に屬するよりして「行者のはからひは自力なれば義といふなり」を仰せられた。而して他力は彌陀如來の選擇本願の念佛往生のこはりを信じて疑ひなければ、即ち他力攝生の佛の御はからひにまかせて往生必定なるゆゑに、すこしも行者のはからひなければ義なしといふて他力廻向の妙旨を示さるゝのである。凡そこの義は無義の對辨に就て、自から二途ありて、其一は聖道門行者の修道を義とし、それに對して浄土門の念佛往生を義なきを義すといはれたのである。法然聖人が聖道門は智慧をきはめて生死をばなれ、浄土門は愚痴にかへりて浄土に生るゝのたまひしも全くこの意義でありて、三學を云ひ六度を云ふも、肝要は智慧である。龍樹菩薩が智を能度となすのたまひしもの諸行を智慧に總括しての御言で、即ちこの意を示されたのである。即ち智慧によりて廢惡修善を激勵し、廢惡修善の功力によりて妄念を斷じて聖智を生じ、以て佛果を證する。之が聖道門修道の方軌である。之を

義○といふ一言をもて示されたのである。この義の修道に堪へず永劫生死を出づる○こ○の不可能なるものを憐愍して願を建て行を修して成就せる覺體が南無阿彌陀佛である。即ち念佛往生の願力であるゆゑ、この願力に救はるゝ○こ○の信ぜらるゝものは、只管如來の御はからひにまかせて自己のはからひのなきまゝ、往生が治定すれば、之を義○なし○といふて、他力攝生の安心を示されたのである。前に出した『正像末和讃』の御讃述がこの意である。其二は往生淨土門の中に於て、第九二十の願力による雜行雜修自力で化土に往生するものを義○云○ひ、之に對して第十八の念佛往生の願力を信ずるものを義○なし○云○ふて、自力往生○他力往生○の相違を示されたのである。本來彌陀如來の五劫の願○永劫の行○によりて、成じたまへる正覺の救濟は念佛往生で、即ち他力攝生亦是れ凡夫直入でありて、願力の御はからひによりて凡夫が淨土に往生して永く生死を離るゝのである。之を他力廻向淨土眞宗○云○ふのである。されば往生するは吾人凡夫でありて而して吾人自身は往生するに義○の要はないのである。然るに一類未熟の機ありて、退いて聖道の修入に堪へず、進んで念佛往生の大利を信受せざるものゝために、之を第十八願の眞宗に引入する方便として設けられたのが第十九二十の誓願である。それで仍ほ聖道門の修善の執心が存するゆゑ、之を義○い○ひ、自力往生にして淨土門他力往生の眞面目にあらざる○こ○を示されたのである。『末燈鈔』に出せる往生に自力他力を分つて義○義○なし○の標示をされた御消息はすべてこの義邊である。

六

義○ははからひで行者の自力を標示し、之に對して他力は彌陀如來の本願力に救はれて往生するので、衆生自心にはからひなければ、之を義○なし○のたまひたる旨趣はよく承知せられたが、義なきを義○す○の言意はいかゞであらうか。或人は義○なきの義は行者のはからひで、義○す○の義は佛本願の御はからひである○と解釋した。此の解釋は法義を鑽仰するにはけつこうであるが、文句を解釋す○こ○は誤りである。すでに法然上人の御言に、義なきを義○し○様なきを様○す○淺きは深きなり○とある。これよりみれば、義なきをもて義○し○様なきをもて様○す○淺きは即ち是れ深きなり○といふ意である。即ち義なきそのまゝ、が是れ義○なすの言意である。世俗に自身の事を自身で處理する○こ○を自ら構ふ○云○ひ、自身の事を他人に構ふてもらふて自身に構はぬに自ら構ふた○と同一○こ○になるを構はぬが構ふたのである○といふが如く、聖道門の行者また淨土方便の行人は、自己の努力によりて出離の大事を成就するは、自己の事を自己で構ふのである、之を義○云○ふ。弘願他力の念佛往生の行者は、煩惱具足罪業深重のために、自力にて出離する○こ○の不可能なるものを、佛同體の大悲より深重の願力をもて攝取して淨土に往生し成佛せしめたまふ○こ○を信じて一念も疑ふ心なきは佛のはからひにまかせて自らはからぬそのまゝ、が自らはからふた○と同一○こ○になる。所謂構はぬが構ふ意○い○ふが義○なき○を義○す○の言意である。すれば義の字は共に衆生に屬してはからひなき心相を義○なし○云○ひ、そのまゝ、が法徳○として行者のよきはからひで

あるといふ意を義こなすこの言意である。猶機相の淺きまゝが法徳の上より即ち深きなりこ云ふが如くである。如來修成の願行が信する一念に衆生の所有こなりて、願行具足の身こして淨土に往生する他力廻向の深旨淨土眞宗の妙趣は眞個にこの義こなきを義こすこの一句に盡されて餘蘊はないのである。親鸞聖人は法然聖人より聞かれたこの御言がよくその御己證に合ひ、この御言がよく御己證の法悦を標示するに、簡にして而も要を得たるを喜びたまふこ同時に、晩年に於て門侶の信仰が動もすれば相亂れんこする兆あるを見て、是れ畢竟する所、凡小の穿鑿である。凡小の穿鑿は淨土往生に何の功がある。惑業の凡夫、出離絶望、唯攝生の佛願力ありて能く淨土に往生し得らるゝのである。凡小のはからひを本こして日夜善惡の沙汰をなすこも凡智小行何の益かあらん。唯如來願力のはからひにまかせて自らはからひなき念佛往生こそ、出離の要道なれこ、極めて明載なる相傳の要語を繰回して門侶を指導されたのである。他力攝生の旨趣、凡夫直入の眞心は、この義なきを義こすこの一句に盡されてありがたし。嗚呼ありがたしこ、眞個にありがたし。南無阿彌陀佛こ、こ、こ。

(大正十四年一月)

一二 至純なる信仰

親鸞聖人は『末燈鈔』第一章に載す)

淨土宗のなかに眞あり假あり。眞こいふは選擇本願なり。假こいふは定散二善なり。選擇本願は淨土眞宗なり。定散二善は方便假門なり。淨土眞宗は大乗のなかの至極なり。

言せられた。選擇本願こいふは、阿彌陀如來の誓願四十八ある中の第十八願の名である。第十八願は、凡夫を攝取して淨土に往生せしめんために諸行を捨て、念佛を取りて往生の行こ定めたる、如來隨自意の願であるから選擇本願こ稱するのである。聖人の又の言せに、

第十八の本願成就のゆゑに阿彌陀如來こならせたまひて、不可思議の利益きはまりましたまきぬ御かたちを、天親菩薩は盡十方無碍如來こあらはしたまへり。このゆゑに、よきひこあしきひこをきらはす、煩惱のころをえらばすへだてずして、往生はかならずするなりこしるべしこなり

(『末燈鈔』第二章に出づ)

このたまふてある。之を淨土眞宗こいふのである。而して釋尊所説の『大無量壽經』は、この選擇本願を演説されたるので、聖人は又『大無量壽經』を淨土眞宗こ言せられた御本典教文類。併し釋尊の『大無量壽經』が淨土眞宗こ云はるゝは、彌陀如來の選擇本願が演説されてある故であるからで、されば淨土眞宗こいふここは、仍り阿彌陀如來の凡夫攝生の法義を標榜す名前でありて、釋尊の所説なるも本來彌陀宗であり、又彌陀本願宗なのである。即ち凡夫が彌陀願力によりて攝取して淨土に生れしめらるゝ、大利益宗の名である。

親鸞聖人が『唯信文意』の中に、善導大師の御言を釋せられて

教令彌陀專復專いふは、教はをしふいふのりいふ釋尊の教勅なり。念はこゝろにおもひ
さだめてこもかくもはたらかぬこゝろなり。すなはち選擇本願の名號を一向專修なれこをし
へたまふここなり。專復專いふははじめの專は一行を修すべしこなり、復はまたいふかさ
ぬいふしかればまた專いふは一心なれこなり。一行一心をもはらなれこなり。專はひこ
ついふここばなり、もはらいふはふたこゝろなれこなり。こもかくもうつるこゝろなき
を專いふなり。この一行一心なるひこを彌陀攝取してすてたまはざれば阿彌陀こなづけた
てまつるこ、光明寺の和尚はのたまへり

言ふてある。『御本典』の中に、第二の『行文類』には、『大經』の彌勒付屬の一念の言を解釋して、一行
なりこ云ひ。第三の『信文類』には、本願成就文の一念を解釋して、一念なりこ云ふ。而して兩處に
同じく善導大師の專心專念の御文を引き、それを『行文類』には解釋して、

釋に專心こ云へるは、即ち一心なり。二心なきこを形すなり。專念こ云へるは、即ち一行なり
二行なきこを形すなり

云ひ。『信文類』には解釋して、

宗師の專念こ云へるは、即ち一行なり。專心こ云へるは、即ち一心なり

云ふてある。一心こ一行、信行相離れぬこが示されてある。

第十八の本願に、至心信樂欲生我國乃至十念こあるが、此は南無阿彌陀佛の御こはり、即ち攝受衆
生の願力を聞信したるありさまを示さるゝのでありて、至心信樂欲生我國いふは、是れ信心のこ
こで、乃至十念いふは即ち念佛のここである。至心信樂欲生我國いふは、至心こ信樂こ欲生我
國いふ三心なれこも、唯名願力の助けたまふをたのみてうたがふ心のなきここであるから、た
是れ一心に彌陀をたのみてうたがひなき一の信心のこころに三心が宛然こしてそろうのである。
さればたここれ一心である。行は口に稱へ身に禮し、意に念ふ三業に渉るも、三業の稱禮念は、た
阿彌陀佛の行を行する一の念佛行なのでありて、口業の稱名に身意二業の禮念が相應するのであ
るから、三業の稱禮念は、即ち一の稱念佛行である。すれば亦是れ一行である。要するに、一向に專
ら彌陀一佛をたのみて餘念の雜るここのないのがこれ一心であり。たこ一阿彌陀佛の名を稱へ
て其威神力を仰崇感謝して他の止惡作善の行に心のうつらざるはこれ一行である。之を善導大
師は專心專念こも專復專こも仰せられたのである。即ち南無阿彌陀佛の攝生をたのみてうこか
ざる心の至純なる信仰のやうを示されたのである。專修正行こも謂ひ、弘願眞宗こも謂ふは、全く
このここである。

三

曇鸞大師が天親菩薩の『淨土論』に説いてある安樂國土の莊嚴功德を註釋さるゝ中に、其の眷屬

莊嚴功德を註釋されて、

凡そ是れ雜生の世界は、若は胎、若は卵、若は濕、若は化、眷屬若干にして苦樂萬品なり、雜業を以ての故に、彼の安樂國土は、是れ阿彌陀如來の正覺淨華の化生する所に非ざるこそあるこそなし。同一に念佛一して別の道なきがゆゑに、遠く通ずるに夫れ四海の内皆兄弟三爲るなり

と云ふてある。此は安樂國土の眷屬は、内徳も外相も平等で、差別のないやうを示さるゝのである。凡そ此三界は、胎卵濕化生れやうに別があり。憂喜苦樂人々相異りて、果報が千差萬別であるが、是れ皆雜業の所感なるからである。然るに彼安樂國の眷屬は、すべてこれ正覺淨華の中に化生して内徳も外相も同一平等で些の差別もないのである。何によつて然るぞなれば、往生の因が同く念佛の一で、各人の別業でないからである。この意よりすれば、すでに往生せるものが一念佛の因によるものなれば、未だ往生せざるも、すでに念佛して往生を期しつゝあるものは、正に彼同類なるべきである。爾らば遠く通ずるに十方世界の念佛衆生は、すべてこれ兄弟にして同一眷屬と云ふべしと云ふのである。されば念佛者は未だ往生せず猶此土に在るも、すでに淨土の眷屬の衆に入りて居るのである。元祖聖人が、

身は此にまだありながら極樂の聖衆の數に入るぞ嬉しき

と詠嘆され、親鸞聖人が

超世の悲願きゝしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねき、心は淨土にすみあそ

ぶと慶嘆されたのもこの意である。

四

念佛とは、勿論口業に南無阿彌陀佛の六字名を稱ふる稱名のことで、之を讃嘆の行と名けてある。念佛には如實と不如實との別があり、名號は能く衆生を攝めて淨土に往生せしむる法なることを知らずして、稱ふる功力によりて往生するやうにおもふて、稱ふる自功をたのむもの、之を不如實の行と名く。其の能く佛願力の攝生を信じて稱して、而も自功をたのむ心なき念佛を、如實修行と名け、讃嘆行と云ふのである。換言すれば、稱ふる功力によりて往生せんことを自力行は不如實で、稱して而も稱功をたのみ、専ら名號法體の攝生の威神力を仰いで、其の因縁の恩に感謝する外なきものを、如實修行といふ。親鸞聖人は曇鸞大師の同一念佛無別道故の御文を、『高僧和讃』に讃述せられて

安樂佛國にいたるには、無上寶珠の名號と眞實信心とについで、無別道故と、きたまふ

とのたまふた。如實の念佛は、唯南無阿彌陀佛の名號法體を仰崇して、自の稱功をたのみざるゆゑ、稱名全くこれ名號である。唯他力をたのみて自力を離れたる内心の發現であるゆゑ、念佛即ちこれ信心である。名號とは法の方より云ひ、信心とは機の方より云ふ。念佛即ち名號法體、亦是れ機受の信心、之を他力廻向の如實の念佛といふ。されば専ら名號法體の攝受をたのみて疑ふ心の雜はらざるは、是れ一心で、唯佛名を稱へて餘善を求むる相なきは、即ち一行である。たゞこの一行一

心の者のみ能く安樂國に往生するのである。之を無別道故のたまふのである。「蓮如上人御一代聞書」に云く、

蓮如上人順誓に對し仰せられ候。法敬ミ我ミは兄弟よミ仰せられ候。法敬申され候。これは冥加もなき御事ミ申され候。蓮如上人仰せられ候。信をえつればさきに生るゝものは兄後に生るゝ者は弟よ、法敬ミは兄弟よミ仰せられ候。佛恩を一同にうれば信心一致のうへは四海皆兄弟ミいへり

ミある。此は蓮如上人が弟子の法敬房順誓に對して師弟同じく阿彌陀佛力によりて往生の大益を蒙るからは、たしかにこれ念佛の同胞である。されば先きに生るゝ者は兄で後ちに生るゝ者が弟であるミ仰せられたのであるが、これは先に出す驚師の「同一に念佛して別の道なきが故に遠く通ずるに夫れ四海の内皆兄弟ミ爲るなり」のたまふた意を體得せられた感想談である。之に記者が附加したのが、佛恩を一同にうれば信心一致のうへは四海皆兄弟ミいへり「ミいふ文字である。佛恩を一同にうればミは法益の一なるこミを云ひ、信心一致ミは機受の同じきこミを云ふ。如實の念佛同一修行のやうをよく了得した言である。専ら阿彌陀佛力を信じ、唯南無阿彌陀佛名を稱ふ一心一行、眞個に至純の信仰である。

五

眞宗は現今十派に分れておるが、それは各教團の歴史組織を異にするからでありて、其教ゆる所

の宗義に於ては、毫しも異なる所なく、全くこれ同一である。それで各派に通じて奉ずる所の御本尊は、本山も末寺も全くこれ同一尊體で、即ち阿彌陀如來の一佛である。随つて門徒各戸の佛壇にも、必ず阿彌陀佛の尊像を奉安して、禮拜恭敬し、決して他の佛菩薩の諸尊を安置奉仕するものはないのである。昨年九月下旬某日發行の中外日報に、天台の本尊調査ミ題して、天台宗に於て最近末寺一般の本尊を調査せる成行を報じた。それによるミ、無慮三千五百ヶ寺の末寺中で、猶ほ八十ヶ寺ほさの不明のものもあるが、すでに調査済のもの三千三百九十三ヶ寺で、さて其の本尊が種々不同で、其の同一百已上の數字を占むるものは、左の七尊であるミいふ。

阿彌陀如來	一、三七九	觀世音菩薩	五七五
藥師如來	三九三	不動明王	三三六
釋迦如來	一七九	地藏菩薩	一七〇
大日如來	二二六		

之で見ると、調査済の三千三百九十三の内に於て、右七尊で三千一百五十八ヶ寺を占てるから、餘の二百三十五ヶ寺は右七尊已外の佛菩薩天部人師であるこミが推知せられる。この七尊已外の本尊を、數字の多少に依らず更に部類別にするなれば、定めて幾多の種別ミなるであらう。されば天召宗寺院の本尊は、佛菩薩天部人師多様區々一定して居らぬのである。我國現今の淨土門は、すべて源空上人の末流で、源空上人は善導大師の專修正行の家風なるゆゑ、本尊は定めて阿彌陀一

佛で念佛を正行とするのであるが、餘他の諸宗派に於ては、殆んそ天台宗のやうに、各寺院の本尊は一定せぬやうである。思ふに、斯やうに本尊の一定せぬことは其の宗派の教義による現象であり、その宗義には敢て妨はないのでもあらうけれども、僧俗各人の安心行儀が、區々多様であることは此れでもつて疑ふ餘地はないのである。然るに我が淨土眞宗は、本山も末寺も將た多數門徒の戸々同じく阿彌陀佛を本尊として、朝暮に禮拜恭敬し、決して餘尊を奉安し敬禮するものはないのである。随つて其の行する所の行法は、唯六字名號を稱ふる一念佛でありて、たゞひ三業に通じて各人の作業は異なることも、念佛の行事のみは、僧俗各人の通法である。眞個に同一念佛で至純なる如實修行である。

六

親鸞聖人の教へによる淨土眞宗の遺弟が、『大無量壽經』の所説によりて、一向に専ら阿彌陀一佛を信するは、これ至純なる正信であり、阿彌陀佛の本願に順じて、唯念佛の一行を修するは、即ち至純なる正行である。之を他の宗派に視るに、驚くべき相違がある。日蓮宗には近來一部の宗學者間に、本尊論が喧しく議せられて、甲は釋迦物體ならざるべからずと主張し、乙は曼陀羅繪なるべしと強説して、各々其自説をもつて一宗の信仰を統一せんと思命に努力し、言論に筆議に、甲論乙駁相下らざるの壯觀である。然る處に昨年十月末の中外日報に、妙見や稻荷さんの方が本尊よりも大切な日蓮系統の宗侶と信徒と標して、左の評言を掲げた。日蓮系統で本尊問題が八ヶ間敷く論ぜら

れてゐるが、それは一部の宗乘學者と、一部僧侶間の少數の人の問題に過ぎぬ、大多數の宗侶と信徒は宛も關知せぬ態度にあることは、日蓮系統諸宗派の近來の皮肉だと言れてゐるが、これにつき現に日宗京都區の録司で、一方『宗門公論』といふ月刊雜誌を發行して居る深見某は、其卷頭論に云く、「宗門多數の僧侶信徒が、この重大問題に冷淡なること斯の如きものは、何であらうか、曰く、彼等は曾て本尊に信仰をさゝけたことがないからである」と皮肉り、「彼等の大切な信仰は、たゞ鬼子母神さん、妙見さん、お稻荷さんにさゝけられてある。本尊の如きは如何にならふとも關知する所にあらず。醜狀かくの如き時、それを知りてか知らずか、宗學の權威者が、懸命に相争ふことは、一面笑止である」と擲論ひ、若し夫れ宗學者が奮起一番、妙見や稻荷信仰を論議せんか、闍宗の喧騒は必せりである。彼等が眞實に熱烈に信仰をさゝけて居る對象なもんだもの、宗門から妙見稻荷が一掃された後、吾人は眞實に本尊論を傾聴する。然らざる時は、本尊論の如きは、單に其の論争を見物して欣快を覺ゆるのみと痛烈に本尊問題に關聯して日宗の迷信雜行をもち出して居る。と云ふて居る。之で見ると、嘗に本尊の一定なきのみか、本山も末寺も、其境内に於て、種々の天や神を奉祠して、信徒を引寄せて居り、信徒の參詣するも、本堂の本尊に要なくして、餘他の末祠に信仰をさゝける状態であることが目前に見えるやうであり、又彼れ等識者の眼には其醜狀が慨歎されてあるやうである。斯やうな現狀は、嘗に日蓮宗のみではない。他の諸宗派も殆ん同じやうのこゝである。眞個に迷信雜行の醜態である。反て我眞宗の現實を視るに、その信仰の至純に統一されてあるかを知り

て、大に喜ぶと同時に、亦誇るべき實狀である

七

すべて浄土門の行者は、他の自力諸宗の行者と異なりて、一向に専ら阿彌陀一佛を念じ、只管佛名を稱念する念佛者であるが、眞宗已外の浄土宗では、其阿彌陀佛を念ずる心は、智愚善惡によつて人各別といふのである。隨て其修する念佛の功德に勝劣の別があるのである。同じく念佛を行じながら、其心各別である。又稱名の遍數の多少によりて所得の功德に差別がありて、それで生る浄土の果報に九品の別があるといふのである。思ふにこれは助くる彌陀本願力に不徹底なるからのこゝみである。獨り我が浄土眞宗の念佛者は、往生するこゝみは唯阿彌陀佛の願力による。衆生の智愚善惡は少しもかゝりあいはないに信する、故に願力によりて凡夫そのまゝ、直ちに眞實報土に入りて往生し、即ち成佛するに心得て、たゞ佛恩の深重なる忝さを仰ぎて稱名するのである。親鸞聖人の「唯信鈔文意」に、

すべてよきひまあしき人たふまき人いやしき人を、無碍光佛の御ちかひにはえらばずこれをみちびきたまふを、さきこしむねをするなり。眞實信心をうれば、實報土にむまるををしへたまへるを浄土眞宗とすしるべし

と云ふてある。されば、只管佛願力の攝受衆生をたのみて念佛するので、念佛する其人に智愚善惡の別あるも、念佛する其心得は同一で別はないのである。たゞ本願力をたのみて日夜に念佛して

其深重の恩徳を讃仰し感謝するのである。故に同じく佛願力によりて直ちに眞報土に入りて無始生死の長苦から解脱するのである。之を同一念佛無別道故と云はれたのである。噫、眞個に同一念佛といふこゝみは我浄土眞宗の法悦者の占有である。實に吾人は至幸至福の者である。噫、喜ぶべきこゝみである。是れ偏へに親鸞聖人の賜である。

親鸞聖人によりて至純の信仰者たる光榮を荷ふたのである。宜なり聖人によりて一阿彌陀佛を奉安し日夜に禮敬する眞宗門徒には、必ず報恩講の行事ありて、聖人に感謝の意を表する法要の年年不缺に執行せらるゝこゝみ、憂喜苦樂感情の日夜に變動極まりなき中に在りて、彌陀本願力を信するのみは、金剛堅固にして、すこしも動搖く事なく、善惡淨穢出入の動作に轉變限りなき間にも、唯佛恩を仰ぎ自の幸福を喜ぶ念佛のみは、前後一貫して、何物にも拘束せらるゝこゝみなく、さながら世事に超然たる現狀は、眞個に一心一行至純の信仰である。人世行路難を叫ぶ中に在りて、獨り眞宗信者の吾人のみは、晝夜朝暮、南無阿彌陀佛の一道を勇往邁進して、少しも疑懼の念はないのである。此は是れ親鸞聖人體験の遺教にして、吾人現實の法悦である。嗚呼、至純の信仰、尊むべし、信すべし。南無阿彌陀佛、

(大正十五年一月)

是山和上小部集終

本書は、和上の古稀記念式に際して、有志に頒つために、編輯出版されたものであります。

編者は、初め、専ら和上の宗學研究に關する小論文のみを輯めたいと思ひましたが、中途考ふる所あつてその編輯方針に幾分の變更を加へました。さ申しますのは、本書を受け取らるゝ有志の方は、必ずしも宗學者のみではなくて、寧ろ法味愛樂に餘念なき方も多々あらうと考へたからであります。是れ本書の前半に研究物を後半に法話物を編輯した所由であります。

本書に收むるものは總て既刊出版物ではありませんが、必ずしも和上の筆になるものゝみではありません。従つて筆者の誤りもあれば印刷の誤りもあると考へましたので、此のたび出版するに當つて編輯の體裁上編者が勝手に筆を加へた點も少くありません。若し誤りあらば編者を責めて頂きたいと思ひます。

本書に收めて置きたいと思ふもので、編者の記憶にのみ存して今手元にないために、その出來ないものがあることを、甚だ遺憾に存じます。

昭和二年十一月

編者 しるす

昭和二年十一月廿五日 印刷
昭和二年十二月一日 發行

講述者 是山 惠覺

兩和上古稀記念會代表

編輯者兼 花圓 映澄

印刷者 須磨 勘兵衛

印刷所 京都市北小路新町西入

内外出版株式會社印刷部

京都市西洞院七條南入

京都市堀川通り本願寺勸學寮内

發行所

前田 兩和上古稀記念會

不許
複製

終

